

# 近代の野田の醤油醸造業

(きんだいのののだのしょうゆじょうぞうぎょう)



醤油工場（大正 10 年頃）  
（郷土博物館所蔵）

茨城県岡田郡国生(こっしょう)村（現常総市）出身の小説家・長塚節(ながつかたかし)は、『土』に「野田は郷里から近いので醤油蔵が段々発達して行くに連れて傭(やと)われて行く壮丁(わかもの)が殖(ふ)えて来た。郷里では傭人(ようじん)の給料が暴騰して来た程どの村落からも壮丁が行った」と、明治期の野田の醤油工場の発展の様子を記しています。東京の人口が減少して需要が一時減退し、前年の正月に大火で罹災(りさい)した明治 5 年(1872)でさえ、醸造家 13 家の醤油仕込高は 3 万 6550 石で、野田は他産地と隔絶した生産規模を誇っていました。明治 10 年(1877)に東京の上野公園で開催された第 1 回内国勸業博覧会で茂木佐平治家の亀甲万印(きっこうまんじるし)が花紋賞牌(かもんしょうはい)を受賞し、野田の醤油の名声がますます広まると、偽造品が市場に出回るようになりました。写真の樽貼付け用レットルは、偽造品対策として、パリに注文して容易に真似できないように精巧な金摺にして作ったものです。

明治 20 年(1887)に茂木七左衛門・茂木七郎右衛門・茂木佐平治・高梨兵左衛門・山下平兵衛などの野田周辺の醸造家は、野田醤油醸造組合を結成しました。組合は、無制限な自由競争を廃して醤油などの価格協定、原料麦の価格投票、出荷の統制、雇人・職人の賃金協定を実施し、組合員の共同利益を図りました。また組合は明治 33 年(1900)に野田人車(じんしゃ)鉄道と野田商誘(しょうゆう)銀行（醤油にちなんで命名）を設立し、運輸と金融の面の産業基盤を整備しました。さらに組合は、毎月一度、西光院(さいこういん)において麹(こうじ)の品評会を開き品種向上を図っていましたが、明治 37 年(1904)に、醸造試験場を設立し、野田特有の良質な種麹を造り、これを組合員に配布しました。すでに明治 20 年(1887)に、茂木七郎右衛門は、醤油醸造業界最初の化学試験場を邸内に設けており、野田の醸造家は技術面でも醤油醸造業界をリードする存在でした。

しかし、近代の野田の醤油醸造業も順風満帆なことばかりではありませでした。大正初期の醤油市場は供給過剰傾向になり、醤油価格は低落しました。このため、野田醤油醸造組合は価格維持・引上げを目的とする出荷制限を行いました。醤油組合員内の増産競争は次第に激化する傾向にあり、供給過剰問題は深刻になりました。このような状況下、その多くは同族であった野田の醸造家は、個別分散経営する弊害を避け、山下平兵衛家（現キノエネ醤油）を除き、大正 6 年(1917)に大合同し、野田醤油株式会社が誕生しました。商標は順次、キッコマンに統一され、これが業界最大の醤油ブランドになりました。

詳しくは...

- \* 市山盛雄 1980 『野田の醤油史』 崙書房
- \* 田中則雄 1999 『醤油から世界を見る 野田を中心とした東葛飾地方の対外関係史と醤油』 崙書房出版
- \* 林玲子 天野雅敏編 2005 『日本の味 醤油の歴史』 吉川弘文館

「ルデル集」樽貼付け用レットル（郷土博物館所蔵）



野田醤油醸造の図（郷土博物館所蔵 市指定民俗文化財）



（一部拡大）

